岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

術後ボディイメージが変化した在宅療養者の社会復帰に関する因子の解明に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 好美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/218

Ⅲ．研究経費

平成６年度	１３００千円
平成７年度	４００千円
計	１７００千円

Ⅳ．目的

現在、在宅での看護や介護が注目されているが、その対象は慢性疾患患者の退院後や老人、従来からの保険指導対象者が中心となっており、手術を受け退院した患者への関心は少ないといえる。しかし、手術後の入院日数は手術技術の進歩もあり減少化の方向にあり、手術療法を受けた患者は、創が治癒して退院しても、以前と同じ生活をするには在宅での療養を必要とする。特に悪性腫瘍手術後の患者では、再発転移の可能性をも含んでいる。そして、身体的機能や外観に変化をもたらすような手術、たとえば喉頭全摘出や人工肛門造設、乳房切断などの手術を受け、ボディイメージの変化を余儀なくされた患者は手術前と同じ生活に戻ることはむつかしい。そのため、退院後の在宅療養期間中が社会復帰への第一歩となる。従って、術後患者の在宅療養に対する援助は今後力をいれる必要のある分野である。

そこで本研究は、手術（特に喉頭全摘出術・人工肛門造設・乳房切断）により突然ボディイメージに変化をきたした患者が社会復帰するための在宅療養について検討するために、下記の目的で研究を行った。

1．手術によりボディイメージに変化をきたした患者の身体的、精神的、社会的現状およびソーシャルサポートによる社会復帰の実態を明らかにする。

2．手術によりボディイメージに変化をきたした患者の社会復帰に関係する因子を探索し、どのように関連しあい、社会復帰を促進させているかを解析・検討する。

Ｖ．研究計画と経過

１．平成６年度

初年度は、手術によりボディイメージに変化をきたした患者の身体的、精神的、社会的現状およびソーシャルサポートによる社会復帰の実態を明らかにし、在宅療養の実際を検討する上での基礎資料を得るために以下の調査を行った。

１）手術によりボディイメージに変化をきたした患者の在宅療養の実際についての調査

（１）患者会・某病院の協力を得て、質問紙を用いて、手術によりボディイメージに変化をきたした患者37名の在宅療養の実態を明らかにした。なお調査は継続中である。

（２）喉頭全摘出・人工肛門造設・乳房切断の手術予定で、研究の同意の得られた患者に、面接法および参加観察法を用いて、社会復帰に関わると考えられる要因を検討する資料を収集中である。

２）医療従事者自らのボディイメージに対する認識についての調査

医療従事者86名（ボディイメージに変化を受ける手術患者への看護経験のあるナースと看護経験のないナース）の自らのボディイメージに対する認識と非医療従事者137名との認識の違いについて質問紙を用いて調査し、明らかにした。また、医療従事者については他の病院の看護婦からの資料も収集中である。

2．平成７年度

本年度は、手術によりボディイメージに変化をきたした患者の身体的、精神的、生活的現状およびソーシャルサポートによる社会復帰の実態を明らかにし、在宅療養の実際を検討する上での基礎資料を得るための調査を継続するとともに、患者の社会復帰に関係する因子を探索し、社会復帰に関係する因子を明らかにするための調査を行った。

1）手術によりボディイメージに変化をきたした患者の在宅療養の実際についての調査

患者会・２カ所の病院の協力を得て、手術によりボディイメージに変化をきたした患者に質問紙を用いて資料を収集した。前年度の対象を加え、計76名で検討し、社会復帰に関係する要因を明らかにした。

また前年度からの継続で、喉頭全摘出・人工肛門造設・乳房切断の手術予定で、研究の同意の得られた患者に、面接法および参加観察法を用いて経時的に行っている。現在資料を整理中である。

2）医療従事者自らのボディイメージに対する認識についての調査

２カ所の総合病院の協力を得て、医療従事者 267名の内、ボディイメージに変化を受ける手術患者への看護経験のあるナース157名と看護経験のないナース110名の自らのボディイメージに対する認識の違いと、患者へのアプローチの実態について前年度の質問紙に修正を加えて調査し、明らかにした。

3．平成８年度

前年度に明らかになった社会復帰に関係する因子を用いて質問紙を作成し、これらの因子及び因子間の関連を検証するために調査を行い、ボディイメージに変化を受ける手術患者の社会復帰を促進させる看護について検討する予定である。